

第632回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2021年4月度 ——

- ◇ 開催日
2021年4月19日(月)
- ◇ 議題
＜テレビ番組＞
テレメンタリー2021
「それでも、この国で ～コロナ禍 留学生たちの就職戦線～」
放送日時：2月10日 午前2時25分～2時55分
- ◇ その他
「2020年度下期の番組種別の公表報告」

今回は「新型コロナウイルス」感染の全国的拡大を受け、委員長以外の委員はWEBのテレビ会議システムを利用したリモート参加とした

九州朝日放送株式会社

第632回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2021年4月19日(月)午後3時30分～4時40分
2. 開催場所 九州朝日放送 本社役員会議室
及び「新型コロナウイルス」感染の全国的拡大を受け、委員長以外の委員はWEBのテレビ会議システムを利用したリモート参加

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

委員長	戸田 康一郎
副委員長	赤木 由美
委員	石井 靖子
委員	守田 有理子
委員	石橋 和幸
委員	藤村 まこと
委員	丸石 伸一

欠席委員数 1名 (レポート代読)

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和 氣 靖
常務取締役	笹 栗 哲 朗
総合編成局長兼ラジオ局長	坂 井 剛
報道情報局長	柴 田 高 宏
報道情報局 報道情報センター長	川 崎 浩 司
報道情報局 報道情報センター (プロデューサー)	吉 住 啓 一
報道情報局 報道情報センター (ディレクター)	河 村 聡
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	石 橋 聡
番組審議会事務局 (視聴者・広報室)	松 永 俊 郎

4. 議 題

(1) テレビ番組

テレメンタリー2021「それでも、この国で ～コロナ禍 留学生たちの就職戦線～」
放送日時：2月10日 午前2時25分～2時55分

(2) 2020年度下期の番組種別の公表報告

(3) 4月・5月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

(4) 3月 視聴者・聴取者応答状況の報告

(5) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- コロナ禍で苦戦を強いられている外国人留学生の就職活動をテーマに、対照的な男女2人に密着して10ヵ月間の奮闘を追う、まさにドキュメンタリー番組にふさわしい題材だと思った。「それでも、この国で」というメインテーマに沿った内容になっていると感じた。
- 2人の留学生を長期間、丁寧に取材していると感心した。押し付けがましくなく、視聴者に考えることを委ねる構成になっている部分にも好感を抱いた。登場人物が淡々と語るシンプルな構成だったが、2人の表情の変化がとてもよく伝わった。
- コロナ禍で、日本人も就職活動が厳しさを増していると聞く。留学生の内定率はさらに低いとのデータも示され、状況がよく伝えられていた。こうした留学生たちの就職活動を温かく支援する周囲の様子も描かれており、よかった。
- 2人の留学生の揺れ動く心情や、コロナ禍を含めた、留学生を取り巻く問題点などが非常に丁寧に取材されていた。そもそも日本人に比べて、留学生の内定率がかなり低いことも問題だ。テレビには社会の問題を提起する責務がある。継続的な取材を期待する。
- 人材を採用する企業側が日本の組織や社会に馴染みやすいと判断される留学生を選びがちなのも事実。しかし、番組を通じて、人物そのものを見ることの重要性や、本人の希望を十分に聞いて採用・配属に努める重要性を再確認することができた。
- コロナ禍でも活況を呈す企業はある。より積極的に留学生を採用している企業もあるという。番組を通じて、企業などから問い合わせなどはなかったのか、企業と留学生を結ぶようなマッチングが図られることなどはなかったのか教えて欲しい。

などの評価や質問を頂きました。

また、気になる点や望むこととして、

- どうして今回登場した2人の留学生がフォーカスされたのかという疑問が残った。番組が伝えたかったこと、訴えたかったことが少し不明瞭に感じた。
- 留学生が置かれた状況や行政の関わりなどをコロナ禍前後で比較し、具体的な支援策などについて、もう少し踏み込んだ視点で紹介して欲しかった。情報量が不足していたように感じた。

- 2人の留学生が繰り返し交互に登場したことで、感情移入が難しかった。(就職難から)心の病にかかる留学生もいるとのことだが、もっと困窮している留学生もいると思う。少し状況が一致していない印象を受けた。
- 留学生たちが就職活動で苦戦を強いられる本当の理由が、コロナ禍で就職活動が制約されているからなのか、別の理由によるものなのか、よく分からなかった。
- 本質的な問題は、コロナ禍ではない時にもあるように思う。改めて留学生を取り巻く就職戦線について、深掘りと取材を進めて欲しい。
- 30分の放送時間は短い。もっと多くの視聴者に知ってほしい内容であり、深夜帯での放送は残念に思った。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 本作品は政府や国が「留学生30万人計画」や「入管難民法改正」により外国人労働力を増加させようとする中で、外国人労働者の実態に迫るべく取材を始めた。また、コロナ禍が、より問題点を浮き彫りにしているだろうとの仮説に基づき取材を開始した。
- 「押し付けがましくない」との評価の一方、狙いが「不明瞭」で「情報不足」とのご指摘もあったが、テレビドキュメンタリーなので、映像やインタビューで得られた言葉、感情から「感じ取って」欲しいという狙いだった。
- わずか2人の取材で問題の全てを網羅することは不可能だが、長期的な取材で全体像を想像して欲しいとの狙いがあった。「もっと困窮している留学生もいると思う」とのご意見もあったが、そうしたことを考えてもらう「きっかけ」にして欲しかった。
- 「2人が交互に登場したことで、感情移入が難しかった」というご指摘について、背景や性別が異なる2人を交互に取り上げることで、問題を少しでも立体的に見せる意図だった。たどり着いた結末が対照的になり、構成は狙い通りだったと考えている。
- 「留学生の内定率が低いことも問題」とのご指摘は、その通りだと感じている。そうした点に踏み込む構成も検討したが、30分弱の番組では描き切れないと判断した。今後、国策の構造的な問題なども番組化したいと考えている。
- 番組を見た企業からの問い合わせは、複数件寄せられた。留学生の一人は一時帰国の後、現在、飲食店で正社員として働き、再び滞在ビザを得るに至っている。

などの説明をしました。